

短期交換留学生の リエントリー・ステージにおける課題の分析

—逆カルチャーショックと留学活用を中心に

高濱 愛
田中共子

I. はじめに

2008年に発表された「留学生30万人計画骨子」には、日本に受け入れる外国人留学生数拡大に向けた様々な施策が掲げられている（文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省，2008）。その中には、外国人留学生の「卒業・修了後の社会の受け入れの推進」策として、「帰国留学生の同窓会の組織化支援，活動支援など帰国後の元日本留学生のフォローアップの充実を図」ることが記されている。これは、留学前・留学中だけでなく、帰国後にも留学経験者に対する働きかけが必要であるという認識を示すものといえる。

同骨子では留学生の受け入れが強調される一方で、交換留学等によって日本人学生の海外留学を推進していく方針も掲げられている。だがその具体的な方策は、特に明記されてはおらず、手探りの状態にあると推察される。だが同骨子が目指している、留学による「交流促進」や「学生の流動性向上」を実現する手立てを考えていくなれば、留学生の受け入れだけでなく、派遣すなわち日本人学生の海外留学も並行して進めて、双方向的な動きを作り出していくことが必要になるものと思われる。

留学生の送り出しが今以上に推進されるなら、その留学交流における成

果も、今以上に問われていくだろう。そうなれば留学生の送り出しを機械的にこなすのみならず、帰国後にその成果を根付かすという発想も注目されていくことと予想される。筆者らは、そこでは留学の経験を活用する「留学活用」という視点が、より求められるようになるのではないかと考えている。

渡部（2003）によれば、留学経験は職業的キャリアの形成にのみ関連付けられるものではなく、広くライフ・キャリア、すなわち個々人の日常生活とも深くかかわっているものであるという。そして懸念されるのは、年月を経ることにより留学経験の風化が進んでいくことであり、そこで重要になるのは、風化防止のために試みられる帰国後の活動なのだという。

こうした認識の上に立つと、現在の日本では、留学経験者に対する働きかけがはなはだ少ないことに気づく。そして日本人学生の帰国後を直視した逆カルチャーショック対策や留学活用に向けてのトータルケアが、いまだ未整備であることに思い至る。筆者らは、留学の前中後に渡る長期的ビジョンを備えた留学生教育を、異文化間教育の視点から構想していきたいと着想した。日本人の元留学生に帰国後サポートを提供しながら、留学を帰国後の生活の中で長きにわたって生かせるよう、教育的に支援していくという狙いを持った、異文化間教育を提案していきたいと考えている。

派遣留学生に対する支援策を帰国後に拡充するためには、第一段階として、帰国後の課題についての基礎的な調査が必要になるだろう。帰国後の課題を取り上げた報告としては、Gaw（2000）や渋谷（2006）など、逆カルチャーショックに関する先行研究が散見される。しかし渋谷（2006）も指摘するように、帰国後に関する研究は総じて希薄である。その中で、逆カルチャーショック以外の課題、すなわち留学の意義づけや効果、活用に関するものまでは探求が及びにくいのが現状である。臨床的な症状は注目されやすいとしても、実際に帰国後に向き合う問題を考えると、就職活動、経済などと多岐に渡ることは珍しくない。これらに対処しながら、帰国という環境移行に伴う再調整と再適応をこなし、人間として成長し価値ある

人生を紡ぎ出していくことこそが、帰国後の留学生の総合的な課題と考えられる。長期的視野の留学生支援には、この範囲までが含まれるべきだろう。だが現在は、悩みの様相など臨床的な問題にはわずかに光があたるものの、人間的な成長など、ポジティブサイコロジーの発想で帰国後をみつめる視点は不十分である。そこで研究の第二段階としては、帰国後の「再適応」の問題を乗り越えて、いわば「留学活用」に踏み出そうとする姿をとらえておくことが必要だろう。自然発生的に生じたその努力と成長の様相から、帰国後の発達的变化を促す教育的支援のための視点と方法を探ってみたい。

以上のような観点から本研究では、「逆カルチャーショック」と「留学活用」を中心とした帰国後の課題について、海外留学経験者を対象に質問紙調査を実施した。調査協力者としては、日本からの交換留学経験者に焦点を当てた。彼らは「留学生30万人計画骨子」において、今後さらなる計画の推進が目されている存在として、注目される。本稿では、帰国して一年に満たない、帰国後の数カ月間をリエントリー・ステージとしてとらえる。そして特に困惑が大きいこの時期に、彼らが抱えている課題について尋ね、内容を整理する。その知見に基づいて、異文化間教育の視点から、彼らにどのような帰国後サポートを提供できる可能性があるかを検討することとした。

II. 方法

調査対象者 日本のX大学に在籍中の、人文社会系の分野を専攻する日本人学部生10名(表1)。全員がX大学の協定校における短期留学経験者であり、留学期間は4カ月から11カ月で、帰国後1月から7カ月が経過している。留学先には英語圏も非英語圏も含まれ、北米2カ国、欧州4カ国に渡る。留学形態は、北米への短期語学研修(3名)、北米への短期交換留学(2名)、欧州への短期交換留学(5名)である。年齢は21歳から23歳で、男性3名と女性7名からなる。全員、留学先の大学によ

って定められた、留学に必要とされる語学力要件を満たしたうえで留学していた。

表1 調査協力者

ID	性別	年齢	留学先地域	留学種別	留学期間	帰国後経過期間
A	女	21	北米	語学研修	4か月	1か月
B	女	21	北米	語学研修	4か月	3か月
C	女	21	北米	語学研修	4か月	1か月
D	女	22	欧州	交換留学	9か月	6か月
E	女	22	欧州	交換留学	9か月	5か月
F	男	22	欧州	交換留学	9か月	4か月
G	男	23	欧州	交換留学	11か月※	4か月
P	女	21	欧州	交換留学	8か月	3か月
Q	男	22	北米	交換留学	10か月	7か月
R	女	22	北米	交換留学	10か月	6か月

※ G は、欧州留学の約1年前に、北米で5か月間語学研修の経験有り。

※※後続の調査における参加者間の識別のため、参加者のIDが、A-GおよびP-Rと不連続になっている。

手続き 2009年某月に、調査実施に先立ってX大学の派遣留学経験者に調査協力を呼びかけ、協力の申し出のあった学生に対して、研究協力の承諾を得たうえで質問紙を渡した。

調査項目 属性と留学の背景について、以下を尋ねた。氏名、年齢、性別、学籍、過去の海外渡航経験、日本での一人暮らし経験の有無、外国語試験のスコア、語学への自信とその理由、帰国後経過期間、留学先については、以下を尋ねた。留学先の国名・大学名と選択の理由、留学形態（派遣・その他）、留学国での使用言語、留学期間、留学目的、留学中の居住形態と同居者の有無、留学の費用、留学前・留学中の専攻分野。

留学の質と課題は丹念に尋ねたが、その具体的な質問項目は表2の通りで、留学先における生活、帰国後の生活、留学全体を振り返って、の3領域からなる。留学中のカルチャーショックと困難が、帰国後の困難に肯定的または否定的影響をもたらす可能性を考えて、これらを併せて尋ねた。

表2 質問内容の一覧

<p>I. 留学先における生活</p>
<p>1. 対人関係の傾向（選択式）：多い友人（日本人・ホスト国人・他国人），友人の範囲（学内のみ・学外にも），支援源（大学スタッフ・他の人・自分），友人作り（したいと思った・したいと思わなかった），日本にいた時と比べた友人数（多い・少ない），留学先の友人数（もっとほしい・十分），友人作り（はたらきかけた・はたらきかけなかった），親友（できた・できなかった），対人関係（深く狭く・広く浅く），対人関係のトラブル（多かった・あまりなかった），対人関係の評価（満足・不満足），何でも相談できる友人（いた・いなかった），何でも相談できる友人の属性（日本人・ホスト国人・他国人）。</p> <p>2. 留学中の満足度（5件法）（勉強と対人関係と異文化体験について）。</p> <p>3. 留学生活（選択式）：エンジョイ（できた，どちらともいえない，できなかった）。</p> <p>4. 留学生活（選択式）：有意義（だった，どちらともいえない，ではなかった）。</p> <p>5. 留学中のカルチャーショック（5件法）（「感じた」人は時期と内容を記述）。</p> <p>6. 日本と留学先の国の文化の違いや差（5件法）（「感じた」人は時期と内容を記述）。</p>
<p>II. 帰国後の生活</p>
<p>1. 帰国後の問題（該当の有無を○×で回答，内容を記載）：就職活動，進学，経済，自己，対人関係。</p> <p>2-1. 逆カルチャーショックの有無（各項目該当の有無を○×で回答）：違和感，焦り，孤独，空虚感，憂鬱，不安，いらだち，悲しみ，不眠，食欲減退，やる気がなくなる，落ち込む，疲労感，不満感，怒り，落ち着かない，居場所のなさ，疎外感，生活に輝き・潤いが無い，はりあいのなさ，退屈，刺激のなさ，理解されない感じ，尊重されない感じ，取り残された感じ，留学先に帰りたい，その他（自由記述）。</p> <p>2-2. 逆カルチャーショックの度合い（5件法）（時期と内容を自由記述）。</p> <p>2-3. 逆カルチャーショックの対処法（自由記述後，以下の4項目から最も効果的なものとその理由を自由記述）：自分ひとりですること，他の人と一緒に行くこと，費用をかけて行うこと，費用をかけずにできること。</p> <p>2-4. 帰国後の問題へのサポート希望（人や機関，サポート内容，希望理由を自由記述）。</p> <p>3. 留学前と帰国後の不安・心配の大きさの比較（5件法）（理由も記述）。</p>
<p>III. 留学全体を振り返って</p>
<p>1. 留学前・中・後における以下の8項目について自由記述：日本のイメージ，相手国のイメージ，自分のイメージ，自分の将来目標・キャリアプラン，大事だと思ったこと，語学力の自信，語学力以外に自信のあること，悩んだり問題だと</p>

思ったりしたこと。

2. 日本でも維持した留学先の文化行動（自由記述）。
3. 日本でやめた留学先の文化行動（自由記述）。
4. 帰国後留学先の文化行動の中から日本の文化行動に修正したものと修正理由（自由記述）。
5. 留学で得たもの（5つ）（自由記述）。
6. 留学観（5つ）（「留学は」と呈示する文章完成法）。
7. 留学経験者どうして集まって話せたら、聞いたり話したりしてみたいこと（自由記述）。
8. 帰国後に留学先の大学からの交換留学生との交流の有無、交流内容（自由記述）。

Ⅲ. 結果

帰国後のリエントリー・ステージにおける逆カルチャーショックと留学活用をめぐって、課題と考えられているものを、抽出して整理した。留学中のカルチャーショックと困難も、同様に整理した。

1. 留学中のカルチャーショック

留学中のカルチャーショックを尋ねたところ（質問項目は表2のI-5, I-6）、「とても感じた」「少し感じた」と答えたのは7名（70%）であった。残り3名のうち、A・Gは「あまり感じなかった」、Rは「どちらともいえない」と回答した。具体的な内容を挙げれば、A：食べ物や人の大きさ、B・E・F・P：行動パターン、C・G：会話やトラブル対応などが思い通りにいかないストレス、D：文化の違いによる不便さ、Q：考え方、等にカルチャーショックを感じたことであった（表3）。

文化の違い・差については、Qが「あまり感じなかった」とした以外は、9名（90%）が「とても感じた」「少し感じた」と答えた。内容を挙げると、友人との付き合い方、食事、労働に関する考え方、自己主張、事務対応、時間の感覚、等となっている（表4）。

表3 留学中のカルチャーショック

ID	感じた程度 時期／内容
A	②ときどき／食・人・言語すべてが大きい!! 多い!!
B	⑤友人と遊ぶ約束をしたとき／予定をその日に決めるところ。「今日行く」等、突然予定が入る.
C	④友人との会話／いいたいことが〇〇語でいえない, 体調がすぐにはわるくなるなどストレスを感じていた時もあった.
D	⑤行って1-2ヶ月間／文化の違い, 不便さ.
E	⑤(未記入)／〇〇人の働き方. 余計に働かない, 急がない.
F	④サービス業全般に接したとき／対応が日本では考えられないぐらい悪かった.
G	②トラブル時／自分で解決できる程度のものだった.
P	④到着後すぐ／挨拶の仕方, キス, ハグ.
Q	④留学を始めて2ヶ月ぐらい／暮らし全般, プライバシーの考え方など.
R	③(未記入)

○で囲んだ数字は, 選択肢⑤「とても感じた」④「少し感じた」③「どちらともいえない」②「あまり感じなかった」①「全く感じなかった」のうち選択した番号を指す. プライバシー保護のため, 留学先の国名は「〇〇」と記した.

表4 留学中文化の違い・差について感じたこと

ID	感じた程度 時期／内容
A	④ときどき／人のマナー. 〇〇人は何でもあり!!
B	④友人と出かけたり, パーティーに行ったりする時／友人の友人は友人であるから, 色々な人に声をかけなければならないところ.
C	④友人と遊んだ時／友人が銃をもっていたこと, 料金制度.
D	⑤スーパーや街を歩いていて, レストランや友人宅で／日本人より働かない, 日本より街並がきれい, 日本にはない食事のあれこれ, 接客.
E	⑤〇月から／〇〇国全土や, 大学で度々ストライキが起きた時.
F	⑤人と話をするとき／自己主張をはっきりする, 誰にでも話しかける.
G	⑤一年中／比較が面白かった.
P	⑤(未記入)／公的なオフィスの対応, ちょっとてきとうな感じ, とってもフレンドリー.

Q	② (未記入)
R	④日常的に／待ち合わせの時間に平気で遅れるなど.

○で囲んだ数字は、選択肢の⑤「とても感じた」④「少し感じた」③「どちらともいえない」②「あまり感じなかった」①「全く感じなかった」のうち選択した番号を指す。プライバシー保護のため、留学先の国名は「○○」と記し、Eの記載に一部改変を加えた。

2. 帰国後の課題

帰国後の生活（質問項目は表2のⅡ）は、以下のようにまとめられた。帰国後の問題としては、表5に示したように、7名が経済的問題、4名が就職活動と自分自身の問題を挙げた。自分自身の問題とは、成長したのかといった自分の振り返り（A・D）、外国語力の維持（R）、進路（C）である。

表5 帰国後の問題

項目	ID											該当者割合(%)
	A	B	C	D	E	F	G	P	Q	R		
経済的問題	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	70.0	
就職活動	○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	40.0	
自分自身の問題	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	40.0	
進学・進級	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	30.0	
対人関係の問題	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	20.0	
その他	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	

○は当該項目を選択したこと、×は選択しなかったことを示す。

逆カルチャーショック（質問項目は表2のⅡ-2-1）について、挙げた27項目への該当の有無を表6に示す。最も多く「ある」とされた項目は「留学先に帰りたい」（60%）であり、続いて「違和感」（50%）、「刺激のなさ」（40%）であった。「不満感」「空虚感」「焦り」「孤独」は30%であった。今回の調査協力者には、「不眠」など病的な兆候を示唆する回答はみられなかった。

表6 逆カルチャーショック

項目	ID											該当者割合 (%)
	A	B	C	D	E	F	G	P	Q	R		
留学先に帰りたい	×	○	○	×	○	○	×	○	×	○	60.0	
違和感	○	×	○	×	×	○	○	×	×	○	50.0	
刺激のなさ	×	○	○	×	×	○	○	×	×	×	40.0	
不満感	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	30.0	
空虚感	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	30.0	
焦り	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	30.0	
孤独	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	30.0	
居場所のなさ	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	20.0	
はりあいのなさ	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	20.0	
退屈	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	20.0	
取り残された感じ	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	20.0	
疲労感	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	10.0	
いらだち	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	10.0	
悲しみ	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	10.0	
生活に輝き・潤いが無い	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	10.0	
理解されない感じ	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	10.0	
尊重されない感じ	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	10.0	

○は当該項目を選択したこと、×は選択しなかったことを示す。質問項目のうち、疎外感・不安・不眠・食欲減退・やる気なくなる・落ち着かない・憂鬱・怒り・落ち込む・その他は該当者なしのため、表から省いた。

逆カルチャーショックの度合いについては、「とても感じた」が2名(D・F)、「少し感じた」が3名(C・E・R)、「どちらともいえない」が2名(B・G)、「あまり感じなかった」が1名(A)、「全く感じなかった」が2名(P・Q)であった。Aは「あまり感じなかった」、Pは「まったく感じなかった」としながらも、逆カルチャーショック項目のうち「留学先に帰りたい」に○をしていた。

逆カルチャーショックの対処法としては、対話・人的交流といった活動

化や、目標意識を持つことが挙げられている。具体的には、日本の友達とたくさんしゃべる (A), 留学先の友人に話を聞いてもらう (B・D・E・F・G), 遊ぶ (A・B・C), 語学の継続勉強 (A・E・F), 留学生と遊ぶ (G), 写真を見る (G), 夢を持つ (G) である。他者に言及したのものとしては、Cは「自分でかかえこんではいけないので他の人と一緒に行くこと」が大事と記しており、Fは「気持ちをわかってくれるから友人と連絡をとる」と記している。

逆カルチャーショック等帰国後の問題に対してサポートを希望する機関や人は、他の留学経験者 (3名), 派遣元の大学 (2名), 留学先の国の人 (1名), 地域の国際交流協会 (1名) であった。希望するサポートの内容は、「話をたくさんする」(A), 「思いを共有する」(D), 「留学先からの外国人留学生の紹介」(E), 「就職活動の話」(P・R) であった。サポートを受けたい理由は (括弧内は筆者による補足を示す), 「(留学を経験していない) 他人には分からないから」(D), 「伝え、知ってもらう, 共感してもらうことは楽しいから」(G), 「実際に同じ経験をしている人の話が一番ためになると思うから」(R) であった。

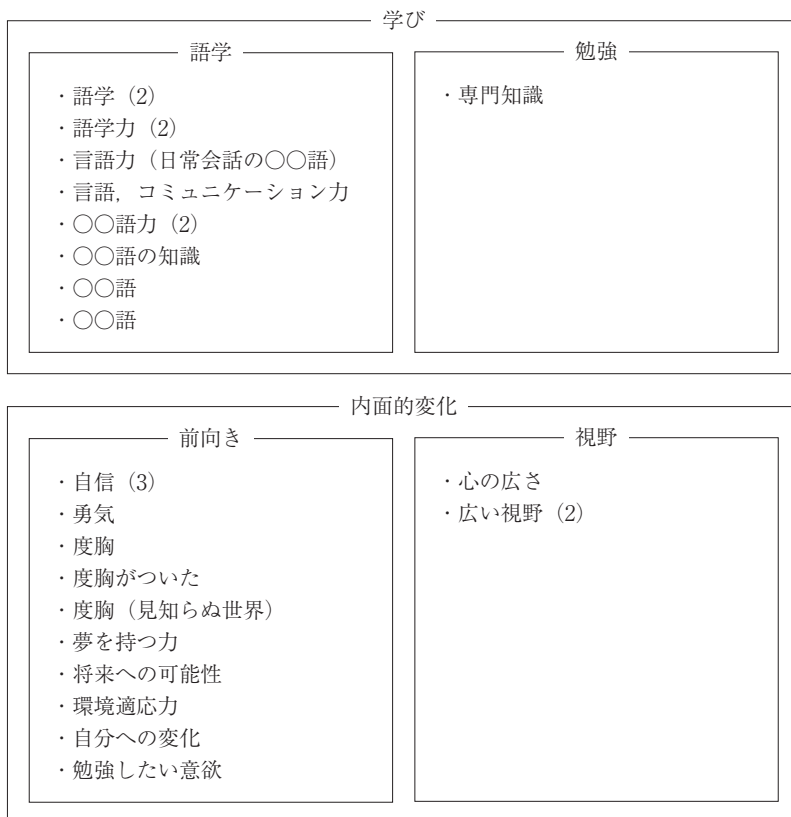
留学前と帰国後の不安・心配の大きさを比較してもらったところ, 「帰国後の方がずっと大きかった」「帰国後の方がやや大きかった」が6名 (A・C・D・F・G・P), 「留学前の方がやや大きかった」が1名 (B), 「留学前の方がずっと大きかった」が3名 (E・Q・R) であった。半数以上が, 留学前よりも帰国後の方が不安・心配が大きかったと回答した。

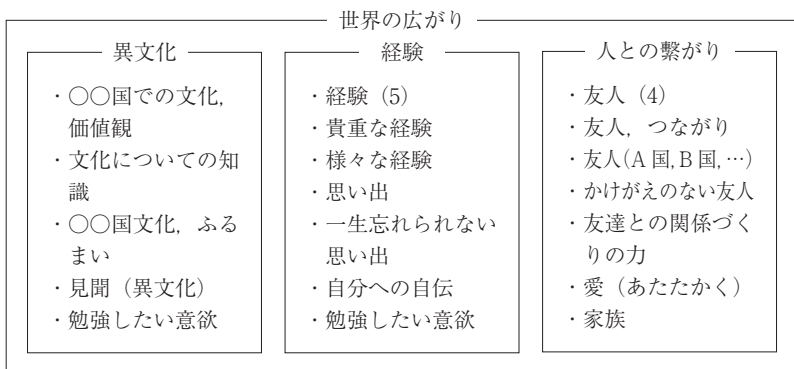
3. 留学全体を通じての所感

留学全体に関する問い (質問項目は表2のⅢ-5, 6, 7, 8) の答えは, 以下のように整理された。「留学で得たもの」として記された合計50個の内容を, KJ法に準じて整理した。すなわち筆者ら2名が, 重なりを省いて簡潔な項目にして, 類似した項目を寄せて小さな単位を作り, さらに類似した単位をくり, 次第に大きなまとまりを作っていく, 最後にそれぞ

れのまとまりごとに内容を表すような題をつけた。その結果、図1が作られ、主に「学び」と「内面的変化」、「世界の広がり」の3つのまとまりが示された。「学び」とは、留学に行かなければできない学びから成り、語学の学習と専門分野の勉強が含まれる。「内面的変化」とは、挑戦した経験に基づく自らの変化を表す項目から成り、視野の広がりと同向きな変化に分けられる。「世界の広がり」とは、異文化の理解、経験、友人・人とのつながりに関するものに分かれる。

図1 「留学で得たもの」の分類

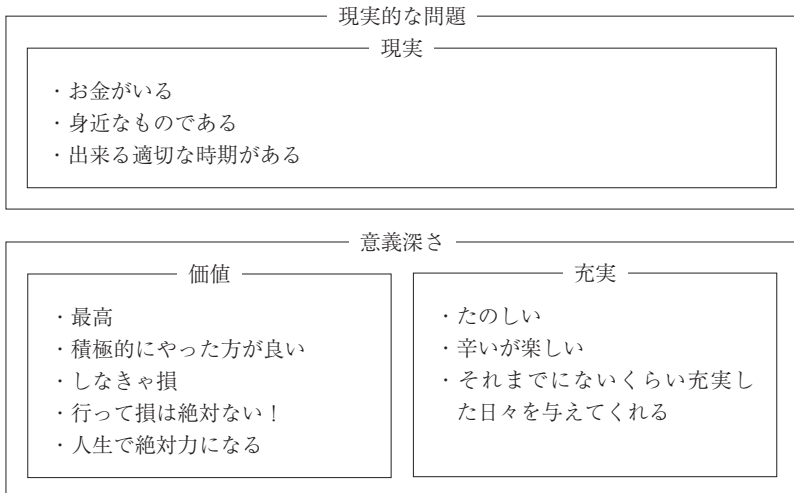




カッコ内の数字は、同じ答えを記した人数を表す。

「留学は○○だ」の文章完成法に答えた合計 50 個の内容についても、同じ方法で整理した。図 2 に示したように、回答は現実的な問題、留学の意義の認識、自己の向上や視野の拡大の肯定的認知、の三つに大きく分けられた。まず、「現実的な問題」とは、時期やお金などの手続きや現実感を指す。次に「留学の意義」とは、高い価値や充実感を与えるものという、評価的な認識を示す。「自己の向上」とは、自己変革、成長、日本理解、語学

図 2 「留学は○○だ」への記述の分類



向上

自己変革

- ・自分次第
- ・自分との戦い
- ・自分を試す場
- ・各個人の責任である
- ・自分を強くする
- ・自分を支えてくれる

成長

- ・成長
- ・自己成長させる場所
- ・自己成長させる一番早い方法
- ・人生を豊かにする
- ・可能性を大きく広げる
- ・将来の可能性を大きく変える
- ・夢へのステップアップである
- ・はじまり
- ・一歩の勇氣

日本を知る

- ・日本と他国を知れる
- ・日本の大切さを再発見させてくれる

英語力 + α

- ・英語力が必ず上昇する
- ・生きた言語修得の絶好の機会
- ・勉強だけではない
- ・言語以上のことを学べる
- ・言語能力を得られるだけではない
- ・言語だけを勉強するためのものではない

世界の拡大

経験

- ・経験
- ・とても良い経験である
- ・そこでしかできない経験をする場
- ・宝物
- ・私の最高の思い出である
- ・予想通りうまくいかないが、予想以上のインパクトがある

友人

- ・友人を増やすチャンス
- ・世界中の友達をつくるチャンス
- ・世界中の友達をつくることのできる
- ・出会い

視野

- ・自分の世界が広がる
- ・視野が何倍にも広がる
- ・別世界
- ・世界の大きさを体感できる
- ・異文化理解につながる窓である
- ・自分の第2の母国をつくるチャンス

力および語学力以外といった点で自らの力が伸びたということである。「世界の拡大」とは、経験や友人を得たり、視野が拡大したりすることを意味する。

留学経験者同士で集える場があれば話したいこととしては、困っていること (B)、経済面 (B)、留学先の人との交流継続法 (A・D)、再留学 (C・D)、将来を語り合いたい (D・P・R)、体験談を語り合いたい (C・F・G・Q)、留学経験の活かし方を知りたい (F・R) と記された。

交換留学先から来日する留学生との交流は、「あり」が6名 (A・B・C・F・G・P) で、中でもGは自らサークルを立ち上げて交流にいそしんでいた。「なし」4名 (D・E・Q・R) のうち、Rは「交流したいけどできていない」、Eは「留学先からの留学生がいないので交流できない」、と記した。

IV. 考察

今回の結果から、以下のことが示された。まず留学経験者は、留学中には、行動面の不便や解決しにくい問題への困惑を通じて、文化差が困難に変換されることを認識しており、この意味でカルチャーショックの体験を持っている。適応とは、行動したときに感じあう違いを、現地における人との相互作用の中で調整していくことだと考えるなら、彼らはまさに異文化適応を経験してきている。こうした渡航先での困惑の経験と調整の努力の後で、彼らは本稿の焦点とした、帰国後のリエントリー・ステージに移行してきた。彼らは日本の環境の中で、現実の生活をなんとか成り立たせることに向き合った。そして自分の成長や将来への活路をどうするかを課題として認識した。この様子から、帰国後の学生にとっての3大課題は、「就職活動、経済、自分」であることが示唆される。ただしこれが帰国後の学生に特有の問題か、留学経験者でない一般学生と共通なのかは、さらなる探求を要する。また「留学先に帰りたい」との反応が、ポジティブな

意味なのかネガティブな意味なのかも、面接などで詳細を明らかにするまでは、ニュアンスが判断できない部分だろう。

興味深いことは、反応する項目が異なっているとはいえ、Q 以外は何らかの逆カルチャーショック項目を「あり」と報告していることである。総じて留学経験者が、帰国後の環境に十分には溶け込んでおらず、満たされない感触を持ち、隔絶感や非充足感を抱いている傾向は読み取れる。留学を肯定的に受け止めながらも、多くは逆カルチャーショックを経験していたといってよいだろう。再適応は時に困難であること、しかし留学の意義を見だして留学活用に向かおうとする動機付けを持つことが伺える。

注目されるのは、逆カルチャーショックの方がカルチャーショックよりつらいとした者が、半数以上にのぼったことである。留学にまつわる困難は、帰国したら終わりではないこと、リエントリー・ステージが、ひときわ支援を必要とする時期でもあることが示唆される。そこでとられた対策は、人数の点からみて、一人でやることと他者と一緒に行うこと、費用の点から見て、費用をかけることとかけないことが混在する。他者は、齟齬を生み出すという意味では困惑の原因にもなるが、反面、質の高い関係ができれば支えになっている。対人関係がサポート源になることは、高濱・西村・田中（2009）など留学中の研究において多く指摘されるところであるが、帰国後においても確認されたといえる。通信費等の諸費用負担というコストを要する場合もあるが、他者とともに活動することがショックの対処に効果的という認識を、彼らは持っていた。留学経験を語り合いたいという要望も、明確に表明している。留学経験者が、自分たちの留学経験に共感してほしいというニーズを持っていることに注目したい。彼らが留学経験者・留学先の人・留学生といったメンバー間で、留学体験を共有したり、情報交換をしたりするといった、情緒サポートや情報サポートを求めているとみれば、それを可能にする教育的支援を考えてしかるべきだろう。

以上から、帰国後の学生に対する支援について考えてみよう。まず帰国

生におけるサポートのニーズが、実際に存在することが明らかになったこと、提供すべきサポートの種類としては、情緒サポートと情報サポートがあることを、認識しておきたい。話し相手やわかり合う相手を求めていることから、自分の留学経験に対して、同じ留学経験者という立場の人から共感してもらいたいというニーズが示唆されるが、これは情緒的サポートに該当する。情報サポートとしては、帰国後に役立つ情報を得たいという希望を持っている点が、該当するだろう。

帰国生を「共感と情報収集のニーズ」を持った集団と見るなら、帰国後の支援としては、自助グループ的な活動の場を提供することが効果的と考えられる。彼らが帰国後に求めている、対話・交流の場や、将来像や目標を語り合う場、写真や思い出をシェアする場は、自助グループ的な活動で展開するのに適した主題である。帰国という名の環境移行によって、それまで日常であった留学生活は非日常と化す。自分だけが、周囲の理解の及ぶにくい体験をしていると気づく。元の自分と必ずしも同じではないのに、周りにはそれが見えにくい。こうして彼らは、異質さや孤独感を抱えるようになる。再適応という調整行為が軌道に乗るまで、リエントリー・ステージの一時的な混乱を支え、彼らが能動的に解決していく助けを得るために、自助グループ的活動は有効であろうと推測される。中には、逆カルチャーショックの悩みはないと答える者もいたが、情報交換や将来プランの語り合いで意欲を高めたり、体験を活用する方向を明確にしたりしていくという、肯定的な「留学活用」のニーズはまた別といえる。ネガティブ面とポジティブ面と両面のサポートを含めて自助グループを企画することで、幅広いニーズに応えた心理教育を提供できよう。

留学という体験は、必ずしも「案ずるより産むがやすし」とはいかず、「産む」こと、すなわち留学自体の大変さに加えて、産んだ後、すなわち帰国後も少なからず困難に出会う体験といってよいだろう。留学経験を現実の生活に着地させた上で再解釈し、どのように今後の人生や社会に位置づけていくかは、長い時間を要する大きな課題といえる。留学は一生を通

じて貴重な財産になり得る、潜在的な価値に満ちた体験である。それを顕在化させていくためには、留学の前と中に加えて、帰国後の教育的なフォローもまた、重要な意義があると強調したい。少なくとも今回の調査協力者に対しては、協定校における留学であったことから、派遣元の大学で帰国後の教育的なフォローの場を設けることは可能であり、彼らの望むサポートの提供を形にできる環境を備えている。帰国後教育は、十分に実現可能な構想と考えられる。

最後に、残された2つの課題について述べておきたい。1つは、質問紙調査だけでなく、面接調査を採用してより個々の事例を深く掘り下げることである。2つめは、実際に自助グループ的活動を実施して、介入実践研究のパラダイムで反応や効果を確かめていくことである。実施に際しては、活動内容の吟味が必要になるが、留学経験者ならではの体験・視線・感情をシェアする活動を軸にするのがふさわしいだろう。自助グループ的教育活動を展開するに当たっては、逆カルチャーショックを緩和することから始めて、帰国後のステージでショックを乗り越えた先に見えてくる、将来構想や留学活用の方向性を探るといった課題への対応も扱っていきたい。そこでは臨床的な支援の文脈だけではなく、ポジティブサイコロジーの発想から付加価値の生産を視野に入れること、そして異文化間教育の視点から教育的支援を理論化し、構成を整えていくことが必要だろう。こうした教育活動を行うことにより、派遣留学生在が留学を通じて得たものを活かす道を拓くことが、より円滑になっていくと期待される。

引用文献

Gaw, K. F. (2000) Reverse culture shock in students returning from overseas.

International Journal of Intercultural Relations, 24, pp. 83-104.

文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省 (2008)

「留学生 30 万人計画骨子」<http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf> (平成 22 年 8 月 3 日閲覧)

渋谷由紀 (2006) 「海外留學生の帰国後の逆カルチャー・ショックと自文化再適

応に関する調査研究」2004年度JAFSA調査・研究助成プログラム調査研究報告書

高濱愛・西村佳恵・田中共子（2009）「短期日本人留学生のソーシャルサポート・ネットワークの構造に関する定性的研究」『静岡大学国際交流センター紀要』第3号, pp.61-77.

渡部見正（2003）「留学経験とキャリア形成——日本人の外国大学卒者を例として——」『桜花学園大学人文学部研究紀要』5, pp.95-112.

謝辞

本研究は、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究 21653090 代表 高濱 愛）を受けた。